

貝の穴に河童の居る事

泉鏡花

青空文庫

雨を含んだ風がさつと吹いて、磯いその香が満ちている——今日は二時頃から、ずツぷりと、一降り降ったあとだから、この雲かさなの累かさなつた空そらあ合あでは、季節で蒸暑かりそうな処を、身に沁しみるほどに薄寒い。……

木の葉をこぼれる雫しずくも冷い。……糠ぬか雨あめがまだ降つていようも知れぬ。時々ぽつりと来るのは——樹立こだちは暗いほどだけれど、その雫ばかりではなさそうで、鎮守の明神の石段は、わくら葉の散つたのが、一つ一つ皆蟹かにになりそうに見えるまで、濡々と森こずえの梢こずえを潜くぐつて、直線に高い。その途中、処々夏草の茂りに蔽おおわれたのに、雲の影が映つて暗い。

縦横たてよこに道は通つたが、段の下は、まだ苗代にならない水溜みずたまりの田と、荒れた畠はたけだから——農屋漁宿のうおくぎよしゆく、なお言えば商家の町も遠くはないが、ざわめく風の間には、海の音もおどろに寂しく響いている。よく言う事だが、四辺あたりが渺びようとして、底冷い靄もやに包まれて、人影も見えず、これなりに、やがて、逢魔おうまが時になろうとする。

町屋の屋根に隠れつつ、巽たつみに展ひらけて海がある。その反対の、山や裾ますその窪くぼに当る、石段の左の端に、べたりと附着くつついて、溝どぶ鼠ねずみが這はい上あがつたように、ぼろを膚はだに、笠も被かぶらず、一本杖いっほんづえの細いのに、しがみつくように縋すがつた。杖の尖さきが、肩を抽ぬいて、頭の上へ突出むきている、うしろ向むきのその肩が、びくびくと、震え、震え、

脊丈は三尺にも足りまい。小兒こどもだか、侏儒いっすんぼうしだか、小男だか。ただ船虫の影ひろがの拈ひつたほどのものが、靄もに沁み出て、一段、一段と這上る。……

しよぼけ返つて、蠢うごめくたびに、啾しゅう々しゅうと陰氣かすかに幽かな音かがする。腐れた肺いが呼吸いきに鳴るのか——ぐしよ濡れで裾すそから雫すが垂れるから、骨を絞ひびる響きであろう——傘の古骨きしが風に軋きむように、啾々しゅうと不氣味に聞こえる。

「しいッ、」

「やあ、」

しッ、しッ、しッ。

曳えい声ごえを揚げて……こつちは陽気だ。手頃な丸太まるたんぼう棒ぼうを差さ荷しにな

いに、漁夫りようしの、半裸体の、がツしりしたわかもの壮佼が二人、真中まんなかに一尾の大魚を釣るして来た。魚頭を鈎かぎなわ縄で、尾はほとんど地じ摺ずれである。しかも、もりで撃つた生々しい裂傷さききずの、肉のはぜて、真向まっこう、腮あご、鰭ひれの下から、たらたらと流るる鮮血なまちが、雨路あまみちに滴つて、草に赤い。

私は話の中のこの魚うおを写出すのに、出来ることなら小さな鯨と言いいたかつた。大鮪おおまぐろか、鮫さめ、鱧ふかでないと、ちよつとその巨大おおきさと凄じすさまさが、真に迫らない気がする。——ほかに鮫鰈あんこうがある、それだと、ただその腹の膨れたのを観みるに過ぎぬ。実は石投魚いしなぎである。大温にして小毒あり、というにつけても、普通、私どもの目に触れる事がないけれども、ここに担いだのは五尺に余つた、

重量、二十貫に満ちた、逞たくましい人間ほどはあろう。荒海の巖がんしよに棲すみ、鱗うろこ鋭こく、面つらしか顰しかんで、鰭はたが硬たい。と見ると鯨しやちに似にて、彼が城の天守に金銀を鎧よろつた諸侯なるに對して、これは赤合羽あかがつばを絡まとつた下郎が、蒼あおぐろ黒い魚身を、血に底光りしつつ、ずしずしと揺られていた。

かばかりの大石投魚おおいしなぎの、さて価値ねうちといえ、両を出さない。七八十錢に過ぎないことを、あとで聞いてちと鬱ふさいだほどである。が、とにかく、これは問屋、市場へ運ぶのではなく、漁村なるわが町内の晩のお菜かずに——荒磯に横づけで、ぐわツぐわツと、自棄やけに煙を吐く艇ふねから、手鈎てかぎで崖がけ肋腹あばらへ引摺ひきずり上げた中から、そのまま跣足はだしで、磯いの巖いわみち道を踏んで来たのであった。

まだ船底を踏占めるような、重い足取りで、田畝たんぼ添すねいの脛すねを左
右へ、草摺くさすりれに、だぶだぶと大魚おおうおを揺ゆつて、

「しいッ、」

「やあ、」

しっ、しっ、しっ。

この血だらけの魚の現うつしよ世さまの状さまに似にず、梅雨つゆの日暮ひぐしの森もりに掛かつ
て、青瑪瑙あおめのうを畳たたんで高い、石段下いしだんげを、横よこに、漁夫りようしと魚いしで一列いっけつ
になつた。

すぐここには見えない、木の鳥居とりいは、海から吹抜ふきぬけの風かぜを厭いとつ
てか、窪地くぼちでたちまち氾濫あふれるらしい水場みづばのせいせいか、一ひと条すじやや
広い畝あぜを隔へてた、町の裏通うらどりを——横よこに通とつた、正面しょうめんと、撞しゆもく木こ

に打着ぶつかつた真中まんなかに立たつてゐる。

御柱みはしらを低ひく覗のぞいて、映画か、芝居あわびのまねきの旗かたの、手拭てぬぐいの汚これたように、渋茶あいと、藍あゐと、あわれ鰻あわび、小松魚こがつおほどの元氣げんきもなく、棹さおによれよれに見えるのも、もの寂さびしい。

前まへへ立たつた漁夫りようしの肩かたが、石段いしだんを一歩いっぽ出でて、後うしろのが脚あしを上げ、真中まんなかの大魚おほいしなの鰓あごが、端はしを攀よじつてゐるその変かな小男こなまなこの、段だんの高たかさとおなじ処ところへ、生々なまなまと出でて、横面よこづらを鰭ひれの血ちで縫ぬおうとした。

その時とき、小男こなまなこが伸の上のるよううに、丸太棒まるたいぼうの上うから覗のぞいて、

「無慙むざんや、そのざまよ。」

と云いつた、眼まなこがピカピカと光あつて、

「われも世よを呪のろえや。」

と、首を振ると、耳まで被かぶさつた毛が、ぶるぶると動いて……
 腥なまぐさい。

しばらくすると、薄墨をもう一ひとはけ刷した、水田みずたの際を、おつかな吃驚びっくり、といった形で、漁夫りようしらが屈かがみごし腰こしに引返した。手ぶらで、その手つきは、大石投魚を取返しそうな構えでない。鰯どじょうが居たら押おきえたそうに見える。丸太ぐるみ、どか落しで遁にげた、たつた今。……いや、遁げたの候の。……あか禪ふんどうしにも恥じよかし。

「大でっかい魚さかなア石地藏様に化けてはいねえか。」

と、石投魚はそのまま石投魚で野の倒たれているのを、見定めながらそう云つた。

一人は石段を密そつと見上げて、

「何も居ねえぞ。」

「おお、居ねえ、居めえよ、お前めえ。一つ劫おどかしておいて消ええたら。いつまでも躰あたらわれていそうな奴じやあねえだ。」

「いまも言うた事だがや、この魚うおを狙ねらつたにしては、小い奴ちっこだな。」

「それよ、海から己おれたちをつけて来たものではなさそうだ。出た処とこ勝負に石段の上に立ちおつたで。」

「己おらは、魚さかなの腸はらわたから抜出した怨おんりよう霊ようではねえかと思う。」

と掴つかみかけた大魚えら腮えらから、わが声に驚いたように手を退のけて言つた。

「何しろ、水ものには違えねえだ。野山の狐いたち鼬たちなら、面つらが白いか、

黄色ずら。青蛙のような色で、疣えぼえぼ々が立つて、はあ、嘴くちばしが尖つて、もずくのように毛が下つた。」

「そうだ、そうだ。それでやつと思いつけた。絵に描かいた河童かつぼそつくりだ。」

と、なぜか急に勢いきおいついた。

絵そら事と俗には言う、が、絵はそら事でない事を、読者は、刻下に理解さるるであろう、と思う。

「畜生。今ごろは風説うわさにも聞かねえが、こんな処ところさ出おるかなあ。——浜方へ飛ばねえでよかつた。——漁場へ遁にげりや、それ、なかまへ饒舌しゃべる。加勢と来るだ。」

「それだ。」

「村の方へ走つたで、留守は、女子供だ。相談ぶつでもねえで、すぐ引返して、しめた事よ。お前らと、己とで、河童に劫されたでは、うつむけにも仰向けにも、この顔さ立ちっこねえ処だつたぞ、やあ。」

「そうだ、そうだ。いい事をした。——畜生、もう一度出て見やがれ。あたまの皿ア打挫いて、欠片にバタをつけて一口だい。」

丸太棒を抜いて取り、引きそばめて、石段を睨上げたのは言うまでもない。

「コワイ」

と、虫の声で、青蚯蚓あおみみずのような舌をぺろりと出した。怪しい小男は、段を昇切つた古杉の幹から、青い嘴くちばしばかりを出して、麓ふもと

を瞰みおろ下しながら、あけびを裂いたような口を開けて、またニタリと笑った。

その杉を、右の方へ、山道が樹こがぐれに続いて、木の根、岩角、雑草が人の脊より高く生はえみだ乱れ、どくだみの香深く、薊あざみが凄みすじく咲き、野茨のぼらの花の白いのも、時ならぬ黄たそがれ昏ほのあかの仄こずえ明るさに、人の目を迷わして、行手を遮る趣がある。梢こずえに響く波の音、吹当つる浜風は、葎むぐらを渦たにに廻はるわして東西を失わす。この坂、いかばかり遠く続くぞ。谿たに深く、峰はるか遥はるかならんと思わせる。けれども、わずかに一町ばかり、はやく絶崖がけの端へ出て、ここを魚見岬うおみさきとも言おう。町も海も一目に見渡さる、と、急に左へ折曲つて、また石段が一個処ある。

小男の頭は、この絶崖際の草の尖へ、あの、蕈の笠のようになつて、又イと出た。

麓では、二人の漁夫が、横に寝た大魚をそのまま棄てて、一人は麦藁帽を取忘れ、一人の向願巻が南瓜かぶりとなつて、棒ばかり、影もぼんやりして、畝に暗く沈んだのである。

——仔細は、魚が重くて上らない。魔ものが圧えるかと、丸太で空を切つてみた。もとより手ごたえがない。あのばけもの、口から腹に潜つていようも知れぬ。腮が動く、目が光つて来た、となると、擬勢は示すが、もう、魚の腹を撲りつけるほどの勇氣も失せた。おお、姫神——明神は女体にまします——夕餉の料に、思召しがあるのであろう、とまことに、平和な、安易な、しかも

極めて奇特な言が一致して、裸体の白い娘でない、御供を残して
 眠つたのである。

蒼ざめた小男は、第二の石段の上へ出た。沼の干たような、自然の丘を繞らした、清らかな境内は、坂道の暗さに似ず、つらつらと濡れつつ薄明い。

右斜めに、鉾形の杉の大樹の、森々と虚空に茂つた中に社がある。——こつちから、もう謹慎の意を表する状に、ついた杖を地から挙げ、胸へ片手をつけた。が、左の手は、ぶらんと落ちて、草摺の断れたような襷袢の袖の中に、肩から、ぐなりとそげている。これにこそ、わけがあるう。

まず聞け。——青苔に沁む風は、坂に草を吹靡くより、お

のずから静しずかではあるが、階段きざはしに、緑きよに、堂どうのあたりに散ちつた常盤とぎ木わぎの落葉らくえきの乱みだれたのが、いま、そよとも動うごかない。

のみならず。——すぐこの階きざはしのもとへ、灯あかりともしの翁おきな一人、立た出でづるが、その油差あぶらさしの上に差置さしく、燈心あかりが、その燈心あかりが、入相いりあひする夜嵐よあらしの、やがて、颯さつと吹起ふきるにさえ、そよりとも動うごかなかつたのは不思議ふしぎであろう。

嗽しゅうしゅう々々と近づちかづき、嗽しゅうしゅう々と進すすんで、杖つゑをバタリと置おいた。濡鼠ぬみねの袂たもとを敷敷いて、階きざはしの下したに両膝もろひざをついた。

目めばかり光あつて、碧額へきがくの金字こんじを仰あいだと思おもうと、拍手かしわでのか

わりに——片手は利かない——瘦やせた胸を三度打った。

「願いまっしゆ。……お晩でしゆ。」

と、きやきやと透とおる、しかし、あわれな声して、地に頭こゝべを摺すつけた。

「願いまっしゆ、お願い。お願い——」

正面の額の蔭に、白い蝶が一羽、夕顔が開くように、ほんのりと頭あちわれると、ひらりと舞まい下さがり、小男の頭の上をすつと飛んだ。

——この蝶が、境内を切つて、ひらひらと、石段口の常夜燈にひ

たりと附くと、羽ともに点れたように灯影が映る時、八十年やそとしにも近か

ろう、皺しわびた翁おきなの、彫刻また絵画の面より、頬のやや円いのが、

萎なえなえ々とした禰ね宜ぎいでたちで、蚊脛かすねを絞しぼり、鹿革の古ぼけた大き

な燧打袋ひうちぶくろを腰に提げ、燈心を一束、片手に油差を持添え、揉鳥もみ帽子えぼしを頂いた、耳、ぼんの窪くぼのはずれに、燈心はその十筋七筋と ななの抜毛かと思う白髪しらがを覗のぞかせたが、あしなかの音をぴたりぴたりと寄つて、半ば朽崩れた欄干の、擬宝珠ぎぼしゆを背に控えたが。

屈かがむが膝を抱く。——その時、段の隅に、油差に添えて燈心をさし置いたのである。——

「和郎わろはの。」

「三里離れた処でしゆ。——国境くにぎかいの、水溜りのものでござい
まつしゆ。」

「ほ、ほ、印旛沼いんばぬま、手賀沼の一族でそうろよな、様子を見れば
の。」

「赤沼の若いもの、三郎でっしゆ。」

「河童衆、ようござった。さて、あれで見れば、石段を上ら^{のほ}しやるが、いこう大儀そうにあつた、若いにの。……和郎たち、空を飛ぶ心得があろうものを。」

「神職様、おおせでっしゆ。——自動車に轆^ひかれたほど、身体^{からだ}に怪^け我^がはあるでしゆが、梅雨空を泳ぐなら、鳶^{とび}から^す鳥に負けんでしゆ。お鳥居より式台へ掛^からずに、樹の上から飛込んで、お姫様に、失礼でっしゆ、と存じてでっしゆ。」

「ほ、ほう、しんびよう。」

ほくほくと頷^{うなず}いた。

「きものも、灰塚の森の中で、古案山子^{ふるかがし}を剥^はいだでしゆ。」

「しんびよう、しんびよう……奇特なや、せがれ忤……何、それで大怪我じゃと——何としたの。」

「それでしゅ、それでしゅから、お願いに参つたでしゅ。」

「この老ぼれには何も叶かなわぬ。いずれ、姫神への願いじやろ。お取次を申そうじやが、忤、趣は——お薬かの。」

「薬でないでしゅ。——敵かたきうち打うちがしたいのでしゅ。」

「ほ、ほ、そか、そか。敵打。……はて、そりや、しかし、若いに似合わず、流行におくれたの。敵打は近頃はやらぬがの。」

「そでないでしゅ。仕返しでしゅ、喧嘩けんかの仕返しけんかがしたいのでしゅ。」

「喧嘩をしたかの。喧嘩とや。」

「この左の手を折られたでしゆ。」

とわなわなと身震いする。濡れた肩を絞つて、雫しずくの垂るのが、
 蓴じゆんさい菜さいに似た血のかたまりの、いまも流るるようである。

とが尖つた嘴くちばしは、疣いぼだ立つて、なお蒼あおい。

「いたましげなや——何としてなあ。対あいて手はどこの何ものじやの

。」

「畜生！人間。」

しずか「静しずかに——」

ごぼりと咳せいて、

「御おんまえ前まえじゃ。」

しゅツと、河童は身を縮めた。

「日の今日、午頃ひるごろ、久しぶりのお天気かまどいわに、おらら沼から出たでしゆ。崖を下りて、あの浜の竈かまど 巖へ。——神職様かんぬしさま、小鮒こぶな、鱒どじょうに腹がくちい、貝も小蟹こかにも欲しゆう思わんでございましゆから、白い浪の打ちかえす磯端いそばたを、八葉ようの蓮華れんげに気取り、背後うしろの屏びよう風巖ぶいわを、舟後光ふなごこうに真似て、円座おきなさまして……翁様おきなさま、御存じでございましよ。あれは——近郷での、かくれ里。めった、人の目につかんでしゆから、山根の潮の差引きに、隠れたり、出たりして、凸凹でこぼこ凸凹凸凹と、累かさなつて敷く礁いわを削り廻しに、漁師が、天然いけすの生簀いけぶね、生船いけぶねがまえにして、魚さかなを貯えて置くでしゆが、鯛たいも、鰈かれいも、梅雨つゆじけで見えんでしゆ。……掬すくい残りの小ちやつこい鰯いわし子が、チ、チ、チ、（笑う。）……青い鰭ひれの行列で、巖いわ竈かまどの簀すの中

を、きらきらきらきら、日南ひなたぼっこ。ニコニコとそれを見い、見
い、身のぬらめきに、手唾てつばきして、……漁師が網を繕つくぐうでしゆ：
：あの真似をして遊んでいたでしゆ。——処へ、土地とそこには
聞馴ききなれぬ、すずしい澄んだ女子おなごの声が、男に交つて、崖上そばみの岨
道ちから、巖角いわかどを、踏んず、縋すがりつ、桂井かつら井とかいてあるでし
ゆ、印しるし半纏はんてん。」

「おお、そか、この町の旅籠はたごじゃよ。」

「ええ、その番頭めが案内でしゆ。円鬚まるまげの年増と、その亭主ら
しい、長面ながづらの夏帽子。自動車の運転手が、こつこつと一所に來
たでしゆ。が、その年増を——おばさん、と呼ぶでございましゆ、
二十四五の、ふつくりした別嬪べっぴんの娘——ちくと、そのおばさん、

が、おぼしアん、と云うか、と聞こえる……清すずしい、甘い、情のあ
る、その声が堪たまらんでしゆ。」

「はて、異な声の。」

「おららが真似るようではないでしゆ。」

「ほ、ほ、そか、そか。」

と、余念うなずなさそうに頷うなずいた——風はいま吹きつけたが——その
不思議に乱れぬ、ひからびた燈心とともに、白髪しらがも浮世離れして、
翁おきなさびた風情である。

「翁様、娘は中肉にむつちりと、膚はだつきが得えう言われぬのが、び
ちやびちやと潮へ入った。褌つまをくるりと。」

「危あぶなやの。おぬしの前でや。」

「その脛はぎの白さ、常夏とこなつの花の影がからみ、磯風に揺れ揺れするでしゆが——年増も入れば、夏帽子も。番頭も半纏すその裙をからげたでしゆ。巖根いわねづたいに、鰻あわび、鰻、栄螺さいざえ、栄螺。……小鰯こいわしの色の綺麗さ。紫式部といったかたの好きだったというももつともで……お紫むらと云うがほんとうに紫……などというでしゆ、その娘が、その声で。……淡い膏あぶらも、白粉おしろいも、娘の匂いそのまま、膚はだざわりのただ粗あらい、岩に脱いだ白足袋なかの裡なかに潜ひそつて、熟じつと覗のぞいていたでしゆが。一波上るわ、足許あしもとへ。あれと裳もすそを、脛はぎがよれる、裳もすそが揚る、紅あかい帆ふが、白百合しらゆりの船にはらんで、青々と引く波に走るのを見ては、何とも、かとも、翁様。」

「ちと聞苦しゆう覚えるぞ。」

「口へ出して言わぬばかり、人間も、赤沼の三郎もかわりはないでしゆ。翁様——処ででしゆ、この吸盤すいつき用意の水搔みずかきで、お尻を密そつと撫なでようものと……」

「ああ、約束は免れぬ。和郎たちは、一族一門、代々それがために皆怪我をするのじやよ。」

「違ちがうでしゆ、それでした怪我ならば、自業自得うらみで怨恨はないでしゆ。……蛙手に、底を泳ぎ寄つて、口をぱくりと、」

「その口でか、その口じやの。」

「ヒ、ヒ、ヒ、空そらざまに、波の上の女郎花おみなえし、桔梗ききようの帯を見ますと、や、背負守しよいまもりの扉を透すいて、道中、道すがら参詣さんけいした、中山の法華経寺か、かねて御守護の雑司ぞうしケ谷やか、真紅まっかな柘榴ざくろが輝

いて燃えて、鬼子母神の御影が見えたでしゆで、蛸遁げで、岩を吸い、吸い、色を変じて磯へ上つた。

沖がやがて曇つたでしゆ。あら、気味の悪い、浪がかかったかしら。……別嬪べっぴんの娘の畜生め、などとぬかすでしゆ。……白足袋をつまんで。——

磯浜へ上つて来て、巖いわの根松の日蔭あつまに集り、ビール、煎餅せんべいの飲のみ食くするのは、羨うらやましくも何ともないでしゆ。娘の白い頤あごの少しばかり動くのを、甘味うまそうに、屏風巖びょうぶいわに附着くつついて見ているうちに、運転手の奴が、その巖の端へ来て立つて、沖を眺めて、腰に手をつけ、気取つて反そるでしゆ。見つけられまい、と背後うしろをすり抜ける出合がしら、錠の浜というほど狭い砂浜、娘等四人が揃つ

て立つでしゆから、ひよいとそばみち岨路へ飛ぼうとする処を、

——さて、さて、さて——

と娘の声でしゆ。見惚みとれてさら顛があら頭われたか、罷しま了と、慌あてて足許しもとの穴へ隠れたでしゆわ。

間の悪さは、馬蛤まてがい貝のちようどかくれが隠家。——塩を入れると飛上

るんですつてねと、娘の目が、穴の上へ、ふたになつて、熟じつとのぞ覗

く。河童かどうだい、あかんべい、とやつた処が、でしゆ……覗まっげいた瞳

の美しさ、その麗うららかさは、月宮殿の池ほどまっげござり、睫まぶたが柳さざなみの小波

に、岸を縫なつて、靡なびくでしゆが。——ただ一ひとしずく雫の露となつて、

逆さかさに落おちて吸すわりようと、蕩然とろりとすると、痛いたい、疼いたい、痛いたい、疼いた

いッ。肩のつけもとをぼうぎれ棒切ぼうぎれで、砂越つぎくじしに突つぎくじ挫くじいた。」

「その怪我じゃ。」

「神職様。——塩で釣出せぬ馬蛤まてのかわりに、太い洋杖ステツキでかつ

ぼじった、杖は夏帽の奴の持ものでしゆが、下手人は旅籠屋の番

頭め、這奴しやつ、女ばらへ、お歯向きに、金歯を見せて不埒ふらちを働く。」

「ほ、ほ、そか、そか。——かわいいや悴せがれ、悴うらみが怨は番頭じゃ。」

「違ちがうでしゆ、翁様。——思わず、きゆうと息を引き、馬蛤の穴

を刎飛はねとんで、田打蟹たうちがにが、ぼろぼろ打つでしゆ、泡ほどの砂あわの沫

を被かぶつて転がって遁にげる時、口惜くやしさに、奴の穿はいた、奢おごった長

靴、丹精に磨いた自慢の向脛むこうずねへ、この唾つばをかツと吐掛けたれ

ば、この一呪詛ひとのろいによつて、あの、ご秘蔵の長靴は、穴が明いて

腐るでしゆから、奴に取つては、リヨウマチを煩わづらうより、きと

こたえる。仕返しは沢山でしゆ。——怨^{うらみ}の的は、神職様——娘ども、夏帽子、その女房の三人でしゆが。」

「一通りは聞いた、ほ、そか、そか。……無理も道理も、老^{おい}の存にはならぬ事じゃ。いずれはお姫様に申上ぎようが、こなた道理には外れたようじゃ、無理でのうもなかりそうに思われる、そのしかえし。お聞濟みになろうか。むずかしいの。」

「御鎮守の姫様、おきき濟みになりませぬと、目の前の仇^{かたき}を視^みながら仕返しが出来んのでしゆ、出来んのでしゆが、わア、」

とたちまち声を上げて泣いたが、河童はすぐに泣くものか、知らず、駄^だ々^だ子^{っこ}がものねだりする状^{さま}であつた。

「悴、悴……まだ早い……泣くな。」

と翁は、白く笑つた。

「大慈大悲は仏菩薩ぶつぼざつにこそおわすれ、この年老いた気の弱りに、毎度御意見は申すなれども、姫神、任にんきよう 侠けつの御氣風ましまし、ともあれ、先んじて、お袖そでに縫すがつたものの願ねがい事を、お聞届きこけの模様がある。一たび取次とりごいでおましようぞ——えいとな。……

や、や、や、横扉よこひらから、はや、お縁えんへ。……これは、また、お軽かろ々しい。」

廻廊かいりやうの縁えんの角かくあたり、雲低うんひき柳やなぎの帳とばりに立つて、臙おぼろに神々かみかみしい姿の、翁おきなの声こゑに、つと打うち向むかいたまえるは、細ほそ面おもてただ白玉はくぎよの鼻はな筋すぢ通り、水晶すいしやうを刻きんで、威いのある眦まなじり。額かぶ髪かみ、眉まゆのかかりは、紫むらさの薄うすい袖頭そでずきん巾きんにほのめいた、が、匂におはさげ髪かみの背せに余ある。——紅べ

地金欄にじきんらんのさげ帯して、紫の袖長く、衣紋えもんに優しく引合せたまえる、手かさねの両の袖口に、塗骨の扇つつましく持添えて、床板の朽目の青芒あおすすきに、裳もすその紅うすく燃えつつ、すらすらと蒼つぼみなす白い素足で渡つて。——神か、あらずや、人か、巫女みこか。

「——その話の人たちを見ようと思う、翁、里人の深切に、すきな柳を欄干さきへ植えてたもつたは嬉しいが、町の桂井館は葉のしげりで隠れて見えぬ。——広前の、そちらへ、参ろう。」

はらりと、やや蓮葉はすはに白脛しらはぎのこぼるるさえ、道きよめの雪の影を散らして、膚はだを守護する位が備わり、包おもてましやかなお面より、一層世の塵ちりに遠ざかつて、好色の河童の痴たわけた目にも、女の肉とは映るまい。

姫のその姿が、正面の格子に、銀色の染まるばかり、艶々つやつやと

映つた時、山やまがらす鴉はしぐらとの嘴くちばし太が——二羽、小刻みに縁を走つて、

片足こまげたずつ駒下駄くちばしを、嘴くちばしでコトンと壇の上に揃えたが、鴉くつがなつた
沓くつかも知れない、同時に真まっくら黒な羽が消えたのであるから。

足が浮いて、ちらちらと高く上つたのは——白い蝶が、トタンにその塗下駄くぐの底を潜くぐつて舞上つたので。——見ると、姫はその蝶に軽く乗つたように宙を下り立つた。

「お床しょうぎ几、お床几。」

と翁が呼ぶと、栗鼠りすよ、栗鼠よ、古栗鼠の小栗鼠が、樹の根の黒檀こくたんのごとくに光沢つやあつて、木目は、蘭を浮彫にしたようなのを、前脚で抱えて、ひよんと出た。

袖近く、あわれや、片手の甲の上に、額を押伏せた赤沼の小さな主は、その目を上ぐるとひとしく、我を忘れて叫んだ。

「ああ、見えましゆ……あの向う丘の、二階の角の室まに、三人が、うせおるでしゆ。」

姫の紫の褙つました下に、山やまふところ懐の夏草は、淵ふちのごとく暗く沈み、野茨のぼら乱れて白きのみ。沖の船の燈ともしびが二つ三つ、星に似て、ただ町の屋根は音のない波を連ねた中に、森の雲に包まれつつ、その旅館——桂井の二階の欄干が、あたかも大船の甲板のように、浮いている。

が、鬼神の瞳に引寄せられて、社やしろの境内なる足許に、切立きつたての石段は、疾はやくその舷ふなばたに昇る梯子はしごかとばかり、遠おちこち近おきての法規おきてが乱れ

て、赤沼の三郎が、角の室という八畳の縁近に、鬢びんの房ふつりした束髪と、薄手な年増の円鬘まるまげと、男の貸かしど広袖てらを着た棒ぼう縞じまさえ、靄もやを分けて、はつきりと描かれた。

「あの、三人は？」

「はあ、されば、その事。」

と、翁が手てびさし庇しして傾いた。

社の神木の梢こずえを鎖とぎした、黒雲の中に、怪しや、冴さえたる女の声して、

「お爺さん——お取次。……ぼう、ぽっぽ。」

みみずく
木菟みみずくの女性である。

「皆、東京の下町です。円鬘は踊の師匠。若いのは、おなじ、師

匠なかま、姉あねぶん分のものの娘です。男は、円鬚の亭主です。ぽっ
ぼう。おはやし方の笛吹きです。」

「や、や、千里眼。」

翁が仰ぐと、

「あら、そんなでもありませんわ。ぽっぼう。」

と空でいった。河童の一肩、聳そびえつつ、

「芸人でしゆか、土農工商の道を外れた、ろくでなしめら。」

「三郎さん、でもね、ちよつと上手だつて言いますよ、ぽう、ぽ
っぼう。」

翁ははじめて、気だるげに、横にかぶりを振つて、

「芸一通りさえ、なかなかのものじゃ。達者というも得難いに、

人間の癖にして、上手などとは行過ぎじやぞよ。」

「お姫様、トツピキピイ、あんな奴はトツピキピイでしゆ。」

と河童は水搔みずかきのある片手で、鼻の下を、べろべろと擦こすつていった。

「おおよそ御合点と見うけたてまつる。赤沼の三郎、仕返しは、どの様に望むかの。まさかに、生命いのちを奪とろうとは思うまい。厳しゆうて笛吹は眇めかち、女どもは片耳殺そぐか、鼻を削るか、蹇あしなまひ、跛つこどころかの——軽うて、気絶ひきつけ……やがて、息を吹返さすかの。」

「えい、神職様かんぬしさま。馬蛤まての穴にかくれた小さなものを虐しいたげました。うつてがえしに、あの、ご覧ろうじ、石段下を一杯に倒れた血みどろの大魚おおうおを、雲の中から、ずどどど！だしぬけに、あの三人の

座敷へ投込んで頂きたいでしゆ。氣絶しようが、のめろうが、鼻かけ、齒^{はッ}かけ、大な賽^{おおきさい}の目の出次第が、本望でしゆ。」

「ほ、ほ、大魚を降らし、賽に投げるか。おもしろかる。悴^{せがれ}、思いつきは至極じゃが、折から当お社もお人ずくなじや。あの魚は、かさも、重さも、破れた釣鐘ほどあつて、のう、手頃には参らぬ。」

と云つた。神に使うる翁の、この譬^{たとえ}喩^{ことば}の言を聞かれよ。筆者は、大石投魚を躪^{あら}わすのに苦心した。が、こんな適切な形容は、凡慮には及ばなかつた。

お天守の杉から、再び女の声で……

「そんな重いもの持運ぶまでもありませんわ。ぼう、ぽっぽ——

あの三人は町へ遊びに出掛ける処なんです。少しばかり誘さそをかけますとね、ぽう、ぽっぽ——お社ちか近まで参りましょう。石段下へ引寄せておいて、石投魚の亡者を飛上らせるだけでも用はたりましょうと存じますのよ。ぽう、ぽっぽ——あれ、ね、娘は髪のもつれを撫なつておられます、頸えりの白うございますこと。次の室まの姿見へ、年増が代つて坐りました。——感心、娘が、こん度は円まるま鬻げ、——あの手がらの水色は涼しい。ぽう、ぽっぽ——鬻げ鬻げを撫でつけますよ。女同士のああした処は、しおらしいものですね。酷ひどいめに逢うのも知らないで。……ぽう、ぽっぽ——可哀相ですけど。……もう縁側へ出ましたよ。男が先に、気取つて洋ス杖テツキなんかもつて——あれでしょう。三郎さんスを突いたのは——

かえり
 帰途は杖にして縋すがろうと思つて、ぼう、ぽっぽ。……いま、すぐ、

玄関へ出ますわ、ごらんなさいまし。」

まっくら
 真暗な杉に籠こもつて、長い耳の左右に動くのを、黒髪で捌さばいた、

女顔の木菟みみずくの、紅い嘴あかくちばしで笑うのが、見えるようで凄すさまじい。その

顔が月に化けたのではない。ごらんなさいましという、言葉が道

をつけて、トンネル隧道を覗のぞかす状さまに、遙はるかにその真正面へ、ぱつと電燈

の光のやや薄赤い、桂井館の大式台あらわが顕あらわれた。

向う齒の金齒が光つて、しるしぼんでん印半纏くつぬぎの番頭が、沓脱そぼの傍そばにた

つて、長靴を磨こいでいるのが見える。いや、磨こいでいるのではない

い。それに、客ではない。ひね捻り廻くして鬱ふさいだ顔がんしよく色は、愨然ふびん

や、河童のぬめりで腐くつて、ポカンと穴があいたらしい。まだ宵

だというに、番頭のそうした処は、旅館の閑散をも表示する……背後うしろに雑木山を控えた、鍵の手形なりの総二階に、あかりの点ついたのは、三人の客が、出掛けに障子を閉めた、その角座敷ばかりである。

下廊下を、元気よく玄関へ出ると、女連の手は早い、二人で歩あ行板ゆみいたを衝つと渡つて、自分たちで下駄を揃えたから、番頭は吃びつく驚りして、長靴を掴つかんだなりで、金齒むきだを剥出しに、世辞笑いで、お叩頭おじぎをした。

女中が二人出て送る。その玄関ともしびの燈を背に、芝草と、植込の小松の中の敷石を、三人が道なりに少し畝うねつて伝つたわつて、石造いしづくりの門にかかげた、石ぼやの門燈に、影を黒く、段を降りて砂道へ出

た。が、すぐ町から小半町引込んだ坂で、一方は畑になり、一方は宿の圀かこいの石垣が長く続くばかりで、人通りもなく、そうして仄ほのくら暗い。

ト、町へたらたら下りの坂道を、つかつかと……わずかに白門燈を離れたと思うと、どう並んだか、三人の右の片手三本が、ひよいと空へ、揃って、踊り構えの、さす手に上った。同時である。おなじように腰を捻った。下駄が浮くと、引く手が合つて、おなじく三本の手が左へ、さつと流れたのはじまりで、一列なのが、廻つて、くるくると巴ともえに附着くつついて、開いて、くるりと輪に踊る。花やかな娘の笑聲が、夜の底に響いて、また、くるりと廻つて、手が流れて、棲つまがかえ翻る。足腰が、水みず馬すましの刎はねるように、

ツイツイツイと刎ねるように坂くだりに行く。……いや、それがまた早い。娘の帯の、銀の露の秋草に、円鬚の帯の、浅葱あさぎに染めた色絵の螢が、飛交とびかつて、茄子畑なすばたけへ綺麗にうつり、すいと消え、ぱつと咲いた。

「酔つとるでしゆ、あの笛吹。女どもも二三杯。」と河童が舌打して言った。

「よい、よい、遠くなり、近くなり、あの破鐘われがねを持扱あつかう雑作ざさくに及ばぬ。お山の草叢くさむらから、黄腹、赤背の山鱗やまうろこどもを、絢交なえまぜに、三筋の処を走らせ、あの踊りの足許へ、茄子畑から、によつによつと、蹴出しらはぎす白脛からへ搦からましよう。」この時の白髪は動い

た。

「爺じいい。」

「はあ。」と烏帽子ふきが伏る。

姫は床しょうぎ几ぎに端然と、

「男が、口のなかで拍子を取るが……」

翁は耳を傾け、皺手しわでを当てて聞いた。

「拍子ではござりませぬ、ぶつぶつと唄のようで。」

「さすが、商売人くろうと。——あれに笛は吹くまいよ、何と唄うえ。」

「分りましたわ。」と、森で受けた。

「……諏訪すわ——の海——水底みなそこ、照らす、小玉石——手には取れども袖は濡ぬらさじ……おーもーしーろーお神楽かぐららしいんでございませぬ。お、も、しーろし、かしらも、白し、富士の山、麓ふもとの霞——峰の白雪。」

「それでは、お富士様、お諏訪様がた、お目かけられものかも知れない——お待ち……あれ、氣はやの疾い。」

紫の袖が解けると、扇子おうぎが、柳の膝ちように、丁と当った。

びくりとして、三つ、ひらめく舌を縮めた。風のごとく駆下りた、ほとんど魚の死骸しがいの鰭ひれのあたりから、ずるずると石段を這はい返えして、揃って、姫を空に仰いだ、一ひと所ところの鎌首は、如意にょいに

似て、ずるずると尾が長い。

二階のその角座敷では、三人、顔を見合わせて、ただ呆れ果ててぞいたりける風情がある。

これは、さもありそうな事で、一座の立女形たるべき娘さえ、

十五十六ではない、二十を三つ四つも越しているのに。——円鬘

は四十近で、笛吹きのごときは五十にとどく、というのが、手を

揃え、足を挙げ、腰を振って、大道で踊ったのであるから。——

もつと深入した事は、見たまえ、ほつとした草臥れた態で、真

中に三方から取巻いた食卓の上には、茶道具の左右に、真

新しい、播粉木、および杓子となんいう、世の宝貝の中に、

最も興がった剽ひょうきん 軽おかしものが揃って乗っていて、これに目鼻のつかないのが可訝おかしいくらい。ついでに婦二人おんなの顔が杓子と播粉木にならないのが不思議なほど、変な外出そとでの夜であつた。

「どうしたつていうんでしよう。」

と、娘が播粉木の沈黙を破つて、

「誰か、見ていやしなかつたかしら、可厭いやだ、私。」

と頤おとがを削つたようにいふと、年増は杓子で俯向うつむいて、寂しそうに、それでも、目もとには、まだ笑わらいの隈くまが残つて消えずに、

「誰が見るものかね。踊よりか、町で買った、播粉木とこの杓しゃもじをさ、お前さんと私とで、持つて歩行あるいた方がよっぽどおかし

い。」

「だって、おばさん——どこかの山の神様のお祭に踊る時には、まじめな道具だって、おじさんが言うんじゃないの。……御幣ごへいとおんなじ事だって。……だから私——まじめに町の中を持ったんだけれど、考えると——変だわね。」

「いや、まじめだよ。この播粉木しやもじと杓子しやくしの恩を忘れてどうする。おかめひよつとこのように滑稽おどけもの扱いにするのは不届き千万さ。」

さて、笛吹——は、これも町で買った楊ようきゆう弓 仕立の竹に、雀が針がねを伝つたわつて、嘴くちばしの鈴を、チン、カラカラカラカラカラ、チン、カラカラと飛ぶ玩弄品おもちゃを、膝について、鼻の下の伸びた顔でいる。……いや、愚に返った事は——もし踊があれなりに続いて、

下り坂を発奮はずむと、町の真中まんなかへ舞出して、漁師町の棟を飛んで、海へころげて落ちたろう。

馬鹿気ただけで、狂人きちがいではないから、生命いのちに別条はなく鎮静した。——とところで、とぼけきつた興は尽きず、神巫みこの鈴から思いついて、古びた玩弄品屋の店で、ありあわせたこの雀を買ったのがはじまりで、笛吹はかつて、麻布辺の大資産家で、郷土民俗の趣味と、研究と、地鎮祭をかねて、飛驒ひだ、三河、信濃しなのの国々の谷谷谷深く相交こうさする、山また山の僻村へきそんから招いた、山民一行の祭に参じた。桜、菖蒲あやめ、山の雉子きじの花踊。赤鬼、青鬼、白鬼の面も三尺に余るのが、斧おのまさかり、鉞きりの曲舞する。浄め砂置いた広庭の壇場には、幣ぬさをひきゆい、注連しめかけわたし、来きたります神の道は、

(千道、ちみち百綱、ももづな道七つ。)とも言えば、(綾を織り、あや錦を敷きにしきて招じる。)と謡うほどだから、奥山人が、代々に伝えた紙細工に、巧わざを凝らして、千道百綱を虹にじのように。飾かざりの鳥には、雉子、やまどり山鶏、秋草、もみじを切出したのを、三重みえ、七重ななえに——たなびかせた、その真ま中に、丸太薪たきぎを堆たかく烈々と燻くべ、大釜おおがまに湯を沸かせ、湯玉あられの霰あられにたばしる中を、前後あとさきに行違い、右左に飛廻つて、松明たいまつの火に、鬼も、人も、神巫みこも、禰宜ねぎも、美女も、裸も、虎の皮も、紅くれないの袴はかまも、燃えたり、消えたり、その、ひゆうら、ひゆ、ひゆうら、ひゆ、誼訪みなそこの海、水底みなそこ照らす小玉石、を唄いながら、黒雲ひぎように飛行する、その目覚しさは……なぞと、町を歩あ行きながら、ちと手真似で話して、その神樂の中に、青いおかめ、

黒いひよつとこの、扮装いでたちしたのが、こてこてと飯粒をつけた大
 杓子おしゃくし、べたりと味噌を塗った太播粉木ふとすりこぎで、踊り踊り、不意を襲
 つて、あれ、きやア、ワツと言う隙ひまあらばこそ、見物、いや、参
 詣の紳士はもとより、装よそおいを凝らした貴婦人令嬢の顔へ、ヌツと突
 出し、べたり、ぐしやツ、どろり、と塗る……と話す頃は、円鬚
 が腹筋はらすじを横によるやら、娘が拝むようにのめつて俯向うつむいて笑う
 やら。ちよつとまた踊が憑ついた形になると、興に乗じて、あの番
 頭を噴出ふきださせなくつては……女中をからかおう。……で、あろう
 事か、荒物屋で、古新聞で包んでよこそう、というものを、その
 ままで結構よ。第一色気むきだざかりが露出しに受取ったから、荒物屋
 のかみさんが、おかしがつて笑うより、禁厭まじないにでもするのか、

と気味の悪そうな顔をしたのを、また嬉しがって、せきりよう寂寥たる
 夜店のあたりを一廻り。横町を田畝たんぼへ抜けて——はじめから志し
 た——山の森の明神の、あの石段の下へ着いたまでは、馬にも、
いのしし猪にも乗った勢いきおいだった。

そこに……何を見たと思う。——通合わせた自動車に、消えて
 乗って、わずかに三分。……

宿へ遁返にげかえった時は、顔も白澄むほど、女二人、杓子と播粉木
 を出来得る限り、搔合かきあわせた袖の下へ。——あら、まあ、笛吹は
 分別で、チン、カラカラカラ、チン。わざと、チンカラカラカラ
 と雀を鳴らして、これで出迎えた女中そだちの目を逸そらさせたほど
 なのであった。

「いわば、お儀式用の宝ものといつていいね、時ならぬ食ちやぶだ卓いに乗ったつて、何も気味の悪いことはないよ。」

「気味の悪いことはないつたつて、一体変ね、帰る途みちでも言つたけれど、行がけに先刻さつき、宿を出ると、いきなり踊出したのは誰なんでしょう。」

「そりや私だろう。掛引のない処。お前にも話した事があるほどだし、その時の祭の踊を实地に見たのは、私だから。」

「ですが、こればかりはお前さんのせいともいえませんわ。……話を聞いていますだけに、何だか私だったかも知れない気がする。」

「あら、おばさん、私のようよ、いきなりひとりでに、すつと手

の上つたのは。」

「まさか、卷込まれたのなら知らないこと——お婿さんをとるのに、間違つたら、高島田に結いおうという娘の癖に。」

「おじさん、ひどい、間違つたら高島田じゃありません、やむを得ず洋ハイカラ髪なのよ。」

「おとなしくふつくりしてる癖に、時々ああいう口を利くんですからね。——吃びっくり驚させられる事があるんです。——いつかも修善寺の温泉宿ゆやどで、あすこに廊下の橋がかりに川水を引入れた流ながれの瀬があるでしょう。巖いわぐみ組にこしらえた、小さな滝が落ちるのを、池の鯉が揃つて、競つて昇るんですわね。水をすらすらと上るのは割合やさしいようですけれど、流れが煽あおつて、こう、颯さっとせく、

落口の巖角いわかどを刎はね越すのは苦艱くげんらしい……しばらく見てみると、
 だんだんにみんな上った、一つ残ったのが、ああもう少し、もう
 一息という処で滝壺へ返って落ちるんです。そこよ、しつかりッ
 てこの娘ひと——口へ出したうちはまだしも、しまいには目を据えて、
 熟じつと視みたと思うと、湯上りの浴衣のまま、あの高々と取った欄
 干を、あツという間もなく、跣足はだしで、跣足またで跨いで——お帳場で
 そういいましたよ。随分おてんばさんで、二階の屋根づたいに隣
 の間へ、ばア——それよりか瓦かわらひさしの廂ふしから、藤棚越しに下座敷のぞを覗
 いた娘さんもあるけれど、あの欄干を跨いだのは、いつの昔、開
 業以来、はじめてですつて。……この娘ひと。……御当人、それで巖
 飛びに飛移つて、その鯉をいきなりつかむと、滝の上へ泳がせた

じやありませんか。」

「説明に及ばず。私も一所に見ていたよ。吃驚びっくりした。時々放れ業をやる。それだから、縁遠いんだね。たとえばさ、真のおじきにした処で、いやしくも男の前だ。あれでは跨いだんじやない、飛んだんだ。いや、足を宙へ上げたんだ。——」

「知らない、おじさん。」

「もつとも、一所に道を歩行あるいていて、左とか右とか、私と説が違つて、さて自分が勝つと——銀座の人込の中で、どうです、それ見たか、と白い……」

「多謝サンキユウ。」

「遅たくましい。」

「取消し。」

「腕を、拳固がまえの握にぎりこぶし拳こぶしで、二の腕の見えるまで、ぬつと象の鼻のように私の目のさきへ突出つきだした事があるんだからね。」

「まだ、踊ってるようだね、話がさ。」

「私も、おばさん、いきなり踊出したのは、やっぱり私のように思われてならないのよ。」

「いや、ものに誘われて、何でも、これは、言合わせたように、前後甲乙、さっぱりと三人同いっとき時だ。」

「可いや厭やねえ、気味の悪い。」

「ね、おばさん、日の暮方に、お酒の前。……ここから門のすぐ向うの茄子なす畠ばたけを見ていたら、影法師のような小さなお媼ばあさんが、

杖に縋すがつてどこからか出て来て、畑の真中まんなかへぼんやり立って、

その杖で、何だか九字でも切るような様子をしたじやアありませんか。思出すわ。……鋤すき 鍬くわじやなかつたんですもの。あの、持ってたもの撞しゅもく木じやありません？ 悚然ぞつとする。あれが魔法で、私たちは、誘い込まれたんじやないんでしようかね。」

「大丈夫、いなかでは遣る事さ。ものなりのいいように、生なれ茄子なすのまじないだよ。」

「でも、畑のまた下道には、古い穀倉こくぐらがあるし、狐か、狸か。」
 「そんな事は決してない。考えているうちに、私にはよく分った。雨続きだし、石段すべが迂すべるだの、お前さんたち、蛇へびが可恐こわいのかといつて、失礼した。——今夜も心ばかりお鳥居の下まで行つた——

毎朝拍手かしわでは打つが、まだお山へ上らぬ。あの高い森の上に、千
 木ぎのお屋根が拝される……ここの鎮守様の思召しに相違ない。――
 五月雨さみだれの徒然つれづれに、踊を見よう。――さあ、その気で、更あらためて、
 ここで真面目まじめに踊り直そう。神様にお目にかけるほどの本芸は、
 お互にうぬぼれぬ。杓子舞、播粉木踊だ。二人は、わざとそれを
 お持ち、真面目だよ、さ、さ、さ、さ。可いかい。」
 笛吹は、こまかい薩摩さつまの紺こん紺こんの単衣ひとえに、かりものの扱帯しごきを
 しめていたのが、博多はかたを取つて、きちんと貝の口にしめ直し、横
 縁の障子を開いて、御社おやしろに。――一座退しきつて、女二人も、慎み
 深く、手をつかえて、ぬかずいた。

栗鼠りすが仰向けあおむけにひっくりかえった。

あの、チン、カラ、カラ、カラカラカラ、笛吹の手の雀は雀、杓子は、しゃ、しゃ、杓子と、す、す、す、す、播粉木を、さしたり、引いたり、廻り踊る。ま、ま、真顔を見さいな。笑わずにいられるか。

泡を吐き、舌を噛かみ、ぶつぶつ小じれに焦じれていた、赤沼の三郎が、うっかりしたように、思わず、にやりとした。

姫は、赤地錦の帯脇まもりに、おなじ袋の緒をしめて、守刀がたなと見参まもらせたは、あらず、一管の玉の笛を、すつとぬいて、丹花の唇、斜つらめに氷柱つららを含んで、涼しく、気高く、歌口を――

木菟みみずくが、ぼう、と鳴く。

社の格子が颯と開くと、白兔が一羽、太鼓を、抱くようにして、腹をゆすつて笑いながら、撥ばち音を低く、かすめて打った。

河童の片手が、ひよいと上つて、また、ひよいと上つて、ひよこひよここと足で拍子を取る。

見返りたまい、

「三人を堪忍してやりや。」

「あ、あ、あ、姫君。踊って喧嘩はなりません。うう、うふふ、蛇も踊るや。——藪やぶの穴から狐のぞも覗いて——あはは、石投魚いしなげも、ぬさりと立った。」

わつと、けたたましく絶叫して、石段の麓ふもとを、右往左往に、人数は五六十、飛んだらう。

赤沼の三郎は、手をついた——もうこうまいる、姫神様。……

「愛想あいそのなさよ。撫なで子こも、百合も、あるけれど、活きた花を手

折ろうより、この一折持つていきや。」

取らしようと、笛の御手みてに持添えて、濃い紫の女扇を、袖すれ

にこそたまわりけれ。

片手なぞ、今は何するものぞ。

「おんたまものの光は身に添い、案山子かかしのつづれも錦にしきの直垂ひたたれ。」

翁かたわらが傍わらに、手を挙げた。

「石段に及ばぬ、飛んでござれ。」

「はあ、いまさらにお恥かしい。大海そうめい蒼溟やかたに館やかたを造る、跋難ばつなん

佗だ竜王、娑伽羅しやがら竜王、摩那斯まなし竜王。竜神、竜女も、色には迷う

験ためし候。外海小湖に泥土の鬼畜、怯きようじやく弱やくの微輩。馬蛤まての穴へ落ちたりとも、空を翔かけるは、まだ自在。これとても、御恩の姫君。事おわして、お召とあれば、水はもとより、自在のわっぱ。電火、地火、劫火ごうか、敵火、爆火、手一つでも消しますでしゆ、ごめん。」
 とばかり、ひようと飛んだ。

ひよう、ひよう。

翁が、ふたふたと手を拍たたいて、笑い、笑い、「漁師町は行水時よの。さらでもの、あの手負ておいが、白い脛すねで落ちると慄然ふびんじや。見送つてやれの——鴉からす、鴉。」

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

雲は低く灰汁を漲らして、蒼穹の奥、黒く流るる処、げに直
よっけん 頭 せる飛行機の、一万里の荒海、八千里の曠野の五月闇を、
いっせん 一閃し、掠め去つて、飛ぶに似て、似ぬものよ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

北をさすを、北から吹く、逆らう風はものともせねど、海洋の
なみ 濤のみだれに、雨一しきり、どつと降れば、上下に飛かわり、
かけまじ 翔交つて、

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

ひよう、

ひよう。

.....

.....

昭和六（一九三一）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

初出：「古東多万 第一年第一號」やぼんな書房

1931（昭和6）年9月

※初出時の題名は「貝の穴に河童が居る」です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：本山智子

校正：門田裕志

2001年7月19日公開

2012年5月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貝の穴に河童の居る事

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>